

「関西人」村上春樹

金水 敏(大阪大学大学院文学研究科)
東京六稜倶楽部 (オンライン)
2020年9月19日(土)
14:00-15:00

概要

毎年のようにノーベル文学賞の受賞が取りざたされ、世間を賑わせている小説家の村上春樹氏であるが、もとは京都生まれの阪神間育ちで、大学入学を期に東京に移られたのであり、そういう意味ではルーツはれっきとした「関西人」である。彼の書く小説を読まれた方は、一見関西の言語や関西人の感性はそぐわないように思われるかもしれないが、実は量は多くないものの、彼の作品には関西に触れ、あるいは関西弁そのものを話すキャラクターが登場するのも事実である。一体、彼にとって故郷である関西はどのような意味を持ち、またなぜ関西弁キャラクターを小説に登場させるようになったのか。このような問題について、彼の作品を読み解きつつ、関西を離れる関西人の思いを重ねながら、考えてみたい。

1. 私の経歴と研究

経歴

1956年 大阪生まれ
1975年 北野高等学校卒業(87期)
東京大学教養部文科Ⅲ類入学
1977年 東京大学文学部進学
1979年 同 卒業
東京大学大学院人文科学研究科入学
1982年 東京大学文学部助手
1983年 神戸大学教養部講師
1987年 大阪女子大学学芸学部講師
1990年 神戸大学文学部講師
1997年 大阪大学文学部助教授
2001年 大阪大学大学院文学研究科教授

2. 村上春樹について

『ねじまき鳥クロニクル』冒頭

台所でスパゲティをゆでているときに、電話がかかってきた。僕はFM放送にあわせてロッシーニの『泥棒かささぎ』の序曲を口笛で吹いていた。スパゲティをゆでるにはまずうってつけの音楽だった。

電話のベルが聞こえたとき、無視しようかとも思った。スパゲティはゆであがる寸前だったし、クラウディオ・アバドは今まさにロンドン交響楽団をその音楽的ピークに持ちあげようとしていたのだ。しかしやはり僕はガスの火を弱め、居間に行き受話器をとった。新しい仕事の口のことで知人から電話がかかってきたのかもしれないと思ったからだ。

「十分間、時間を欲しいの」、唐突に女が言った。

略歴 (1)

- 1949年、京都市伏見区に出生、まもなく西宮市夙川に転居
- 1967年、兵庫県立神戸高等学校卒業。1浪の後、1968年に早稲田大学第一文学部に入学
- 1974年、国分寺にジャズ喫茶を開店。1975年、早稲田大学卒業
- 1979年、『風の音を聴け』が第22回群像新文学賞を受賞
- 1982年、『羊をめぐる冒険』を発表し、第4回野間文芸新人賞を受賞
- 1985年、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』発表、第21回谷崎潤一郎賞受賞
- 1986年、ヨーロッパに移住（ギリシャ、イタリア、英国等）
- 1987年、『ノルウェイの森』刊行、上下430万部を売る
- 1991年、ニュージャージー州プリンストン大学の客員研究員として招へいされる
- 1994年、『ねじまき鳥クロニクル』第1部、第2部を刊行

略歴 (2)

- 1995年6月帰国。同年8月、『ねじまき鳥クロニクル』第3部刊行。1996年第47回読売文学賞受賞
- 1997年3月、地下鉄サリン事件被害者へのインタビューをまとめた『アンダーグラウンド』刊行
- 1999年、オウム真理教信者へのインタビューをまとめた『約束された場所で』により第2回桑原武夫文芸賞受賞
- 2000年2月、阪神・淡路大震災をテーマにした連作集『神の子ども達はみな踊る』刊行
- 2002年9月、『海辺のカフカ』発表。2005年、同英訳版 *Kafka on the Shore* が New York Times の “The Ten Best Books of 2005” に選ばれる
- 2006年フランク・カフカ賞、フランク・オコナー国際短編賞を受賞
- 2008年、父村上千秋、90歳で死去
- 2009年、エルサレム賞受賞
- 2009年5月、『1Q84』BOOK1およびBOOK2を刊行、同作品で毎日出版文化賞受賞。同年12月、スペイン政府からスペイン芸術文学勲章が授与される
- 2010年4月、『1Q84』BOOK3を刊行

略歴 (3)

- 2011年、カタルーニャ国際賞を受賞
- 2012年、国際交流基金賞を受賞。『小澤征爾さんと、音楽について話をする』が第11回小林秀雄賞を受賞
- 2013年4月、『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』を刊行
- 2015年9月、『職業としての小説家』刊行
- 2016年、アンデルセン文学賞を受賞
- 2017年2月、『騎士団長殺し』第1部、第2部を刊行
- 2018年、フランス芸術文化勲章コマンドゥールを受章
- 2020年4月、『猫を棄てる 父親について語るとき』刊行。同年7月、短編小説集『一人称単数』刊行

2. 村上春樹と関西弁

「関西弁について」

- 『村上朝日堂の逆襲』(1986)に所収。

僕は関西生まれの関西育ちである。父親は京都の坊主の息子で母親は船場の画家の娘だから、まず100%の関西種と言ってもいいだろう。だから当然のことながら関西弁をつかって暮らしてきた。

(中略)

しかしどういうわけか早稲田に入ることになって (中略) あまり気が進まない東京に出てきたんだが、東京に出てきていちばん驚いたことは僕の使う言葉が一週間のうちにはほぼ完全に標準語一というか、つまり東京弁ですなーに変わってしまったことだった。僕としてはそんな言葉これまで使ったこともないし、とくに変えようという意識はなかったのだが、ふと気がついたら変わってしまっていたのである。気がついたら「そんなこと言ったってさ、そりゃわかんないよ」という風になってしまっていたのである。

(中略)

(承前)

関西弁に話を戻すと、僕はどうも関西では小説が書きづらいような気がする。これは関西にいてどうしても関西弁でものを考えてしまうからである。関西弁には関西弁独自の思考システムというものがあって、そのシステムの中にはまりこんでしまうと、東京で書く文章とはどうも文章の質やリズムや発想が変わってしまい、ひいては僕の書く小説のスタイルまでががらりと変わってしまうのである。僕が関西にずっと住んで小説を書いていたら、今とはかなり違ったかんじの小説を書いていたような気がする。その方が良かったんじゃないかと言われるとつらいですけど。(pp. 22-26)

小説における関西弁の使用 (1)

- 「ことわざ」(1995)
「猿も木から落ちる」ということわざのような出来事をユーモラスな関西弁の語り口で綴るショート・ショート。
猿やがな。なんせ猿がおったんや。嘘（うそ）やあるかい、ほんまものの猿が木の上におったんや。
- 「アイロンのある風景」(1999)
『神の子どもたちはみな踊る』所収。鹿島灘の小さな町で、絵を描いて暮らしているという40代の三宅さんは、順子と、同棲相手の啓介をしょっちゅう呼び出して、海岸で焚き火をする。三宅さんは神戸に家族を持つ関西人で、口の悪い関西弁を話す。この焚き火のエピソードは、『村上朝日堂の逆襲』に収められた「阪神間キッズ」と共通する。
「三宅さん、出身は神戸のほうだっけっていつか言っていましたよね」、啓介がふと思いついたように明るいうちに尋ねた。「先月の地震は大丈夫だったんですか？神戸には家族とかいなかったんですか？」
「さあ、ようわからん。オレな、あっちとはもう関係ないねん。昔のことや」

小説における関西弁の使用 (2)

- 『海辺のカフカ』(2002)
第5章で甲村記念図書館に現れた、大阪から来た夫婦連れは、関西弁でステレオタイプなセリフをしゃべる。
「そら、もったいないことしましたな」と大阪から来た奥さんが本当に惜しそうに行った。「山頭火、今やったらもうえらいお値打ちですのにねえ」
「おっしゃるとおりですね。でも当時の山頭火はまったく無名の存在でしたから、やむを得ないことかもしれません。あとになってみないとわからないこともたくさんあります」と佐伯さんはいきよかに言った。
「ほんまに、ほんまに」と夫は相づちを打った。（上 84頁）

小説における関西弁の使用 (3)

- 『アフターダーク』(2004)
『アフターダーク』には、故あって本名を棄てたというコオロギという女性が登場し、関西弁で、ラブホテルのカオル、コムギという仕事仲間たちと軽妙な会話を交わしている。
「あっちの子はコオロギ」とカオルは言う。「これは本名じゃないけどね」
「すいません。本名は捨てましてん」とコオロギは関西弁で言う。彼女はコムギよりいくつか年上に見える。（p. 52）
- 関西弁を話すコオロギが“過去を捨てた”人物として設定されている。

小説における関西弁の使用 (4)

- 「イエスタデイ」(2004)
『女のいない男たち』(2014)。「僕」の友人の木樽は、田園調布の生まれ・育ちであるにも関わらず、阪神タイガースのファンであるがゆえに大阪弁を自力でマスターした男として描かれている。逆に、「僕」は、関西の生まれであるにも関わらず、東京に出てきて1ヶ月で東京の言葉に変わってしまう。
- 「僕」は関西から東京に出て関西弁を捨てたという、作者の分身であるとする、「木樽」は「僕」とまったく逆のベクトルをたどった人物として提示されている。しかも「阪神ファン」である点が注目される。

小説における関西弁の使用 (5)

- 「イエスタデイ」(2004)
「おれは子供の頃から熱狂的な阪神タイガースのファンでな、東京で阪神の試合があったらよう見に行ってたんやけど、縦縞のユニフォーム着て外野の応援席に行っても、東京弁しゃべってたら、みんなぜんぜん相手にしてくれへんねん。そのコミュニティーに入れへんわけや。それで、こら関西弁習わな思て、それこそ血の滲むような苦勞をして勉強に励んだわけや」
「それだけの動機で関西弁を身につけた？」と僕はあきれて尋ねた。
「そうや。それくらいおれにとっては、阪神タイガースがすべてやったんや。それ以来、学校でも家でもいっさい関西弁しかしゃべらんことにしてる。寝言かて関西弁や」と木樽は行った。
「どや、おれの関西弁はほぼ完璧やろ？」
「たしかに関西の出身者とは思えない」と僕は言った。「ただそれは阪神間の関西弁じゃないよね。大阪市内の、それもありディープな地域のしゃべり方だ」
「おお、ようわかっとな。高校の夏休みに、大阪の天王寺区にしばらくホームステイしとったんや。おもしろいこやったぞ。動物園にも歩いていけたしな」(pp. 69-79)

3. 考察

小説における関西弁の使用 (6)

- 「クリーム」
『一人称単数』所収。神戸で浪人生活を送っていた18歳の「ぼく」が、学年が一つ下の女の子にピアノの発表会に誘われて会場に行ってみると、それがまったくためであつたという出来事について書いている。女の子にかつがれたかと思ひ動転している「ぼく」の目の前に、一人の老人が現れて不思議なことを関西弁で語りかける。
- ウイズ・ザ・ビートルズ
『一人称単数』所収。「僕」の初めてのガールフレンドと約束をして彼女の家に行くと、彼女は不在で、彼女の兄しかいなかった。「僕」は彼に誘われて家に上がり、彼に乞われて、持っていた教科書の副読本にあつた芥川龍之介の『歯車』を朗読する。ガールフレンドの兄は記憶に関わる病氣を持っていて、時折、数時間の記憶がすっぱり抜け落ちるといふ話を関西弁で「僕」に話す。
- 「ヤクルト・スワローズ詩集」
『一人称単数』所収。「僕」は東京在住の小説家で、ヤクルト・スワローズ・ファンである。母親の記憶が次第にあやふやになり、一人暮らしが覚束なくなってきたとき、「僕」は彼女のすまいを整理するために関西に帰った。大きな菓子箱に、阪神タイガースの選手の写真が付いたテレフォン・カードがぎっしり詰め込まれていたのて問いただすと、彼女は、自分が購入したことを真向から否定した。
「変なことを言うねえ。そんなものが買わないやないの」と彼女は言った。「お父さんに聞いてくれたらわかると思うけど」

『猫を棄てる 父親について語るとき』

- 『猫を棄てる 父親について語るとき』(文春 e-book, 2020. 初出は、2019年6月に『文藝春秋』に掲載された「猫を棄てるー父親について語るときに僕の語ること」(pp. 240-267)) では、長らく不和が続いていた父の生涯と死に向き合い、人の生のつながりについて内省的に記している。父とともに夙川の海岸に猫を棄てにいったエピソードの他、父に強制されて日本古典文学を学ばされたこと、阪神タイガースの熱烈なファンであつた父に嫌悪感を抱いたこと、感情的な確執で永らく不和の関係にあつたが、死を前に和解にいたったこと等が書かれている。

文体について

- 彼は、父に反発するようにして生まれ育った関西を飛び出し、同時に関西弁をいわば封印して自分の文体を作った。村上は、処女小説「風の歌を聴け」の文体を決めるために、冒頭部分を一旦英語で書き、それを日本語に翻訳あるいは「移植」するように書き直して、文体の調子をつかんだと述べている（『職業としての小説家』45-47）。そもそも村上春樹の小説文体は一種の翻訳調であると言われ、また例えばリチャード・フロートガンの翻訳で知られる藤本和子の文体に影響を受けていると指摘されることもある（『本当の翻訳の話をしよう』214頁）が、そのことについて本人は「ある意味ではあたっているし、ある意味でははずれている」と述べ、さらに次のように続けている。

僕が求めたのは「日本語性」を薄めた日本語」の文章を書くことではなく、いわゆる「小説言語」「純文学体制」みたいなものからできるだけ遠ざかったところにある日本語を用いて、自分自身のナチュラルなヴォイスでもって小説を「語る」ことだったのです。そのためには捨て身になる必要がありました。極言すればそのときの僕にとって、日本語とはただの機能的なツールに過ぎなかったということになるかもしれません。（『職業としての小説家』48頁）。

『風の歌を聴け』冒頭

「完璧な文章などといったものは存在しない。完璧な絶望が存在しないようにね」

僕が大学生のころ偶然に知り合ったある作家は僕に向ってそう言った。僕がその本当の意味を理解できたのはずっと後のことだったが、少くともそれをある種の慰めとしてとることも可能であった。完璧な文章なんて存在しない、と。

しかし、それでもやはり何かを書くという段になると、いつも絶望的な気分が襲われることになった。僕に書くことのできる領域はあまりにも限られたものだったからだ。例えば象について何かが書けたとしても、象使いについては何も書けないかもしれない。そういうことだ。

8年間 僕はそうしたジレンマを抱き続けた。――8年間。長い歳月だ。

ふるさとを遠く離れること

- また彼は物理的にも日本を離れての海外居住生活が長かった（1986年から1990年までヨーロッパに、また1991年から1995年までアメリカに居住）。その過程で、「ねじ巻き鳥クロニクル」その他の執筆活動を続けていた。また自らの作品の翻訳を積極的にプロモートするなど、日本人作家の中では飛び抜けてグローバルな展開に力を入れてきた（『職業としての小説家』第11回「海外へ出て行く。あたらしいフロンティア」）。すなわち、関西という原点から、東京へ、そして世界へと活動の範囲を遠心的に広げていくとともに、言語面でも、関西弁から離れて標準語へ、そして各国語への翻訳へと媒体を変えながらその勢力範囲を外へ、外へと広げていった。

ヤクルト・ファンであること

- 彼はヤクルト・スワローズのファンであることを公言している。そもそも小説を書こうと決意したのが、1978年4月のよく晴れた日の午後、神宮球場にヤクルトー広島戦を見に行き、外野席に寝転んでビールを飲んでいてヒルトンが二塁打を打ったときに、何の脈絡もなく「そうだ、僕にも小説が書けるかもしれない」と思ったのだとしている（『職業としての小説家』41-42頁）。ここまでヤクルト・スワローズに肩入れをすることの背景には、やはり父が阪神ファンであったことの反動があったのではないか。『猫を棄てる』では、次のように書いている。

甲子園球場によく一緒に野球の試合も見に行った。父は死ぬときまで熱心な阪神タイガース・ファンで、阪神が負けるとひどく不機嫌になった。僕が途中でタイガースを応援するのをやめてしまったのは、そのせいもあったかもしれない。

日本古典文学について (1)

- 村上春樹の父の村上千秋氏は高等学校で古典を教える教師であり、春樹に対して幼少時から古典文学の手ほどきをしていたが、春樹はむしろ父に反発し、自身は海外、特にアメリカの文学に傾倒していった。

村上 僕は、父親の専門が日本の古典だったので、鬱陶しいから日本のものには近づかなかったというのが大きい。

柴田 近づかなくてもなんとなく入ってきてしまうくらい近くにあったんですか。

村上 昔から親にいわゆる日本の古典を勉強で読まされたので、よく読んでいるんだけど、出たくないから逃げている（笑）。僕のところにも『雨月物語』を現代語訳しないかという話がなくなはないけど、英語からの翻訳の方が楽でいいです。（『本当の翻訳の話しよう』62-63頁）

日本古典文学について (2)

- 日本古典文学を踏まえたエピソードや、それどころか古典の詞章の直接引用が、一時期から村上春樹の小説に目立つようになる。『海辺のカフカ』では「生き霊」が源氏物語の例を引いて語られる（第8章、第23章）。『1Q84』では、平家物語の「壇ノ浦の合戦」の場が延々と引用される（第23章）。『騎士団長殺し』では、祠の石の隙間から聞こえる鈴の音が何物であるかという点について、上田秋成の春雨物語に収められた「二世の縁（えにし）」を踏まえて免色によって語られる（「14しかしここまで奇妙な出来事は初めてだ」）。

4. さいごに

さいごに

- 村上春樹は、作家としての出発点から以降、関西から、そして日本から遠ざかり続けるという遠心的な移動を物理的にも象徴的にも続けてきた。そこでは、関西弁的な文体的呼吸を棄て、外国文学のフィルターを借りて日本文学の伝統から自由になり、また日本そのものを脱出して文壇の土壌から遠く離れたところで作家としての営為を続けてきた。そこで作家が遠ざかろうとしたものの核心には、日本古典文学の教師で阪神タイガース・ファンであった父・村上千秋のヴォイスというべきものがあつたと想像してみよう。
- しかし1995年以降、彼の作品には関西弁が、そして日本古典文学の詞章がかなり明瞭に響き始める。それは“原点回帰”というような単純な往還運動と見るべきではなく、彼の文学にさらに豊かなポリフォニーがもたらされたということであり、その契機に例えば阪神淡路大震災を通じての父との交流ということもあつたと想像される。
- 村上春樹の、遠心的発展と、近年特に顕著な「回想」的モードとの間の揺れ幅は、比較すべくもないが、大阪を離れて東京に学び、近年父母を看取った身として、父親との関係性も含めて、共感するところが大きい。

使用テキスト

- 『村上朝日堂の逆襲』朝日新聞社刊(1986); 「ことわざ」『村上春樹全作品 1990～2000① 短編集 I』講談社刊(2002); 『海辺のカフカ 上』新潮文庫(2005); 『アフターダーク』講談社刊(2004); 『神の子どもたちはみな踊る』新潮文庫(2002); 『女のいない男たち』文藝春秋(2002); 『1Q84』新潮文庫(2012); 『職業としての小説家』スィッチ・パブリッシング(2015); 『騎士団長殺し』新潮文庫(2019); 『一人称単数』文藝春秋(2020); 『猫を棄てる 父について語るとき』文春 e-book(2020); 村上春樹・柴田元幸『本当の翻訳の話をしよう』スィッチ・パブリッシング(2019); 『風の歌を聴け』『村上春樹全作品 1979～1989』講談社刊(1993)

参考文献

- 金水 敏 (2020)「村上春樹と関西方言について—遠心的／求心的な移動とポリフォニー」中村三春(監修)・曾秋桂(編集)『村上春樹における移動』pp. 23-40, 淡江大学出版中心.
- 金水 敏・田中ゆかり・岡室美奈子(編著)(2014)『ドラマと方言の新しい関係—「カーネーション」から「八重の桜」、そして「あまちゃん」へ—』笠間書院.
- 江 弘毅 (2018)『K氏の大阪弁ブンガク論』ミシマ社.
- 田中ゆかり (2011)『「方言コスプレ」の時代』岩波書店.
- 田中ゆかり (2016)『方言萌え!? ヴァーチャル方言を読み解く』岩波ジュニア文庫.
- 沼野義充 (2020)「偶然の織り成す運命の物語—村上春樹『一人称単数』『猫を棄てる』における回想と虚構の交錯」曾秋桂他(編集)『2020年第9回 村上春樹国際シンポジウム 村上春樹文学における運命 予稿集』pp. 23-38, 淡江大学村上春樹研究センター.
- 山木戸浩子 (2018)「村上春樹作品における方言の翻訳」「役割語研究会」発表要旨(大阪大学、2018/7/28)